

同年 八月 十五日 終戦につき、戦闘停止命令を受く。敗戦の上、戦争を終結したことになる。

(兵庫県 辻 忠男)

同年 九月 ソ連戦車師団(?)により武装解除を受け、海城砲兵連隊跡に収容される。

わだち

和歌山県 柴田英雄

同年 十一月 十六日 海城駅出発。貨車輸送により、榆樹屯を経て入ソ。

まえがき

同年 十二月 二十六日 モルシャンスク収容所に到着、数多くの強制労働に服す。

昭和二十年八月十五日といえば、今から五十年前の日本人にとっては、敗戦という厳しい現実に向面して、物質的にも精神的にも生涯忘れることのできない大きなショックを受けた日である。

昭和二十三年六月二日 収容所出発、ナホトカ収容所へ。

北朝鮮の咸興で終戦の日を迎えた私は、すでに日本の戦況の不利なことは知っていただけに、ついに来るべきものが来たという感じで、ある程度心の冷静さを保つことができた。けれども敗戦という事実を目前にしては、さすがにこれはただごとではないという不吉な予感はどうしても拭い去ることができなかった。遠く祖国を離れたこの外地で、最後の勝利を信じて昼夜

同年 六月 十二日 ナホトカ出港。

同年 六月 十四日 舞鶴港上陸、復員する。

昭和二十四年六月 在日連合軍司令部(GH

Q)に出頭、当時の状況を聴取される。

以上の経歴の方で、全抑協設立当初より氷上郡支部役

を問わず苦しい戦いを続けて来た日本軍や、日本軍に協力してきた居留民にとって、「無条件降伏」という終結はあまりにもあつけない幕切れであり、残酷無慈悲なものに思えてならなかつた。ここはかねてから反日感情、とりわけ赤化思想の最も強い咸興である。昨日の味方であつた朝鮮人は戦勝国民となり、あたかも自らの力で宿敵日本を倒したような傲慢な態度に豹変したのである。それに、近くに進駐して来るであろう未知のソ連軍のことを考え合わせると、この敵地に取り残される羽目になつてしまつた敗戦国民の前途は真つ暗で、何一つ明るい希望の持てるものはなかつた。しかも、この嫌な予感は何もなく忌まわしい事実となつて日本人の上に振りかかつてきたのである。

思えば、終戦当時に外地にいた多くの日本人の中で、満州、朝鮮でソ連軍の進駐を受けた日本人ほど悲惨な運命にさらされた者はないだろう。

一般居留民と切り離されて別行動を余儀なくされた私たち元軍人は、その後気にかかる居留民の実情を知るよしもなく、政府関係の要人たちと共にソ連領深く

入ることになった。

タタール州エラブガに至るまでにも、転々と移動生活を始めることになった。常に生命の危険と不安におびえながらも、いつかは懐かしい祖国日本に帰ることが出来るだろうとの一縷の望みを心の支えとして、空腹と過酷な労働に耐えてきた。二年間の抑留生活は、私の生涯を通じて永久に癒えない心の傷として残るであろう。しかし、奇跡的にも生きて日本の土を踏むことのできた私にとっては、それは私の第二の人生への尊い試練であつて、むしろ幸せであつたと言えるかもしれない。なぜならば、ただ諦めと忍従よりほかにない悲惨のどん底生活に落ちて、初めて人間の尊さ、美しさ、哀れさ、醜さなど、あらゆる面にわたつて本当の姿に接することができたし、人間生活に理性と信念とがどれほど大切であるかを教えてくれたからである。それは、私の長かつた軍隊生活の教訓以上に貴重なものであつた。

この度、私の抑留生活の思い出を綴るに際し、まことに残念なことは、内地帰還の際、ナホトカで私の記

録はもちろん、印刷物一切が没収された上に、五十年のプランクにより私の記憶も大いに薄れてしまっている。詳しい数字や日時、場所など述べられないことをお断りして、まずは二年間の生活を通じて感じたことの一部を、ソ連の印象なり全般的な様子から述べていきたいと思う。もちろんこれは、日本人収容所という小さな窓口から見たソ連のごく一部の実情にすぎないし、当時のソ連は戦勝国とはいえ、独ソ戦に国運を賭して戦ってきた直後で、国民生活の疲弊は日本の終戦時のそれと全く同じであったと思うがゆえに、これをそのまま今日、五十年後の現在、ソ連邦、現在のロシア連邦にあてはめることは適当ではない。しかし、これはスターリン時代に固く閉ざされていた鉄のカーテンの隙間から見た真実の姿とも言えるのではないだろうか。

ソ連の鉄のカーテンは、外国に対するカーテンばかりではなく、ソ連国民に対する目隠しとも言えるだろう。私の接したソ連人のほとんどは、外国の知識はもちろん、国内の情勢さえもあまり知らなかった。スタ

ーリンに対する信仰的な信頼と、ソ連は軍事面でも経済面でも、世界のどの国よりも一番すぐれているのだと教えられ、その通り信じているだけであると思う。

私たちは現地の新聞を読むことはたまにしかなかったけれども、それには工場や農場の生産状況やノルマ達成の状況など、能率を上げた優秀な労働者などの外、一方的なソ連礼讃の記事が大部分であって、新聞というよりも宣伝臭い何かの機関紙という感じのものであった。

日本人の切腹「ハラキリ」をそのまま現在も信じているくらいだから、彼らの知っている日本の文化程度は、江戸、明治時代のそれかもしれない。万年筆やシャープペンを珍しがり、オンボロの自転車を得意気に見せて「日本にもあるか」「何台くらいあるか」と聞く程度の認識であるのだから。また私たちがこの二年間に町や村で見た自動車の数は、USAマークのついた米国製のトラック数台だけであったことから思うと、こんな質問の出るのもあながち不思議ではないのかもしれない。

私たちが初めてソ連領に奥深く入ったのは、十二月の厳しい風雪の吹きすさぶ真冬であった。ウラジオストックに近いポセツトという小さい港のある田舎駅であつた。そこから、牛馬並みに貨物列車に積み込まれてシベリア鉄道を走り続けて三十日間、ウラル山脈を西に越えたタタール自治共和国であつた。

私たちの目に映つた現地の姿は、灰色一色の暗い油絵を見るような、殺風景で陰気な味気ないものにか感じなかつた。ソ連の冬といえ、半年以上も夜ばかりと言いたいくらいで、太陽のない暗い日の続く国であり、時計を略奪されて持つていない私たちは夜ばかりだか見当がつかない日もあつた。このような厳しい自然現象と北半球の大部分を占める広大な領土に、それぞれ異なつた歴史を持つ数十種類の人種が雑居しているのであるから、国民の風俗習慣は言うまでもなく、物の考え方やモラルに至るまで日本のそれとは全く異なっていることは当然である。一口で言えば、日本のような神経質なきめの細かさはなく、野性的で、単純で、大まかであると言えば当たるかもしれない。私な

りに、革命の起こつた原因も、革命の成功の理由も、この国、この国民なればこそという感を深くしたものである。

## (一) 北鮮

八月十五日　朝鮮警備の任務を帯びて北支から移動してきたばかりの師団は、北鮮咸鏡南道の咸興に司令部を置き、各部隊は興南から定平にかけて鉄道沿線に展開し、日本海沿岸からの敵の上陸作戦に備えて、背後にそびえる狼林山脈に守備陣地の構築を急いでいた。経理部は、もっぱら各部隊に対する糧秣の補給と集積に多忙をきわめていた。私は主計課の仕事に一段落をつけて、W准尉以下五名を山の陣地へ一足先に出発させた後、衣料課の業務を援助することになり、興上里に向いて糧秣の輸送の輸送列車を待つていた。

真夏の太陽は、この小さな田舎駅にも容赦なく照りつけて、プラットホームは燃えるような暑さであつた。じつとしていても流れ出る汗と列車の遅延にいらいらしてきた私は、何回も駅長室を出たり入ったりしていた。すでに京城を出ているはずの列車は、予定の時間

が過ぎ、正午になつてもなかなか姿を現さなかつたのである。とうとうしびれを切らした私は、司令部と連絡を取るために野戦倉庫へ急いだ。

野戦倉庫に着いて初めて、日本の無条件降伏についてラジオ放送があつたことを聞かされた。倉庫長の緊張した表情や、側の兵隊たちの態度からも事実であると察せられた。列車の到着しなかつたわけもこれが原因であるかもしれないと思つた私は、直ちに電話器を取つて威興の司令部を呼び出した。受話器に響く經理部長の声は遠くて聞き取りにくかつたが、日本の降伏と司令部へ引き返せということだけはどうやら確かめることができた。司令部に帰るにしても、陣地へ先行させた部下を連れて帰らねばならないので、トラックに飛び乗つた私は運転手をせき立てて炎天下の道を山の陣地に向かつて急いだ。あえぐようなエンジンの音を谷間に響かせながら進むうちに、道路で作業をしている工兵部隊に出会つたが、彼らに敗戦の報を知らすべきかどうか私の心は迷つた。どうせ早晚知らされることであるが、むれるような暑さの中で汗とほこり

にまみれて働いている姿を見ると、自分から進んで伝える勇氣は出てこなかつた。

やがて行き着く所まで来て、溪谷の道らしい道のない所まで来て止まつた。止まつては進んで、しばらく行くと砲兵陣地の予定地らしい所に来て砲兵部隊が休息していた。その中に私の顔見知りの中隊長がいたのでトラックの方へ呼んで、そつと今日のニュースを伝えた。驚いた表情で周囲の兵隊を見回していたが、先を急ぐ私は、あまり多くを語らずにその場を去り、トラックを進めさせた。「この辺です」と言つて止めた所から運転手はW准尉の名を呼んだ。谷間いっぱい広がつたこだまが消えるか消えないかのうちに、あちこちの岩陰や木立の間から兵隊の姿が現れた。

その中に軍刀を持つたW准尉の姿が見えたので呼び寄せて今日の状況を伝え、引揚げ準備を命じた。しかし、彼はなかなか動こうとせず、不服そうに何回も同じことを聞き返したものである。それは私に聞き返しているというよりも、彼自身の心に言い聞かせているのかもしれない。軍刀を持つ手が震えているので

も、彼の心の内がよくわかった。このように当時の狼林山脈の陣地は私たちの最後の死に場所としていた所で、それだけに寝耳に水の敗戦の報は大きなショックであり、信じがたいものであった。

間もなく準備のできた私たち一行は、現地に残る兵隊たちに、やがて司令部からの命令で帰隊命令と迎えの車が来るであろうことを伝えて別れたのであるが、その後のことは知るよしもなかった。山道から緑の水田の開けた広い威興平野に出た私たちは、赤い夕日を浴びてほこりっぽい砂利道を北へ北へと走り続けた。威興に入ったのは、昨夜まで蔽しかった灯火管制でうつつらしい街であったとは思えないほど明るい変わりようであった。

八月〇日 威興の街は、つい最近までの寂しい様子とは打って変わって、白い朝鮮服をつけた男女の姿が目立って多くなり、家々には新しい国旗が翻り戦勝気分があふれていた。国旗はいつの間に準備していたのか、まるでこの日を予想して待ち構えていたかのような早さで作られていた。よく見ると、もとの日章

旗にちよつと手を加えて間に合わせたようなものもあつた。

八月〇日 ようやく日の沈んだころ、司令部のすぐ横手にある岡の森に突然大きな轟音と共に火の手が上がり、〇〇神社が爆破された。この瞬間私は、ここは内地ではなく北鮮であるという現実にはハッと気がついた。この一事を見てももうどうにもならないことで、現地日本人の諦めと絶望が、不気味な静寂となつて流れているようであった。これは日本人に与える精神的なショックを狙うテロ行為の手初めであった。特に南鮮に比べて北鮮は日本人に冷酷なようで、イデオロギーを異にするだけで何ゆえにこんなにも相違があるのだろうか。日本が三十余年営々として築いて来た民族の融和も一瞬にして水泡に帰したばかりか、人間としての義理人情すら路傍の石のように顧みられなくなつてしまったのである。その根底には、民族の対立感情という炎が消えることなく永久に燃え続けるものなのであろう。

〇月〇日 八月十五日以降師団の作戦行動もな

くなり、京城の軍司令部との連絡もとれなくなつて空白の日々が続いた。実のところ当時のだれもが、日本軍がどうなるのか、どのように処理すればよいのか、的確な判断の下しようがなかった。日本軍を解体するといつても外地部隊はすぐに内地へ引き揚げることもできないし、どのくらい待てばよいのかも全く見当もつかなかつた。その上、ソ連軍が進駐してくればどのような処置がとられるかわからなかつたし、とにかく最も信頼できなければならぬはずの日本政府自体が混沌としている状態であつたから、私たちはこの北鮮で当分の間、自活しなければならぬとして、師団は各部隊にその準備命令や指示を出した。当然経理部の我々が中心となつて推進しなければならぬ。自活の重点といえば食糧の確保であつた。師団という大世帯を抱えての現地調達は至難のことであり、現在地での生産も考えねばならない大変な仕事となつた。

○月○日　ハバロフスクに召喚されることになつた師団長がこの日出発すること、司令部の將兵全員が校庭に集まつて見送つた。副官とともに去つ

て行く今日の將軍の後ろ姿は、気のせいか、寂しい老兵の面影を感じた。

○月○日　ソ連軍の進駐により事態は急変して、師団の自活準備は停止され、ソ連軍の命令指示によつて行動することになり、司令部の衛兵も自動小銃（マンドリン）を持ったソ連兵に代わつた。また、師団は咸鏡南道一帯にわたつて農村の小中学校に分宿することになり、どんな理由があつたのか幾度も幾度も変更があつて、部隊は宿舎を移動させられたようである。今までの移動命令の出なかつた司令部にも、今回が決定的なものであるらしく伝えられた。ソ連軍の意図するところの要は、師団の將兵を將校と下士官と兵に完全に分離するための分宿命令であつたということである。これで実質的に元の師団編制は分散することになつてしまつた。私は、とりあえず季節に応じた最小限の衣類と三日分の食糧の外、日用品を少々持つて行くことにして、その他の物は全部焼却することにした。明日から始まる收容所生活がどんなものであるか分からないだけに一つ一つに未練の残る物であるが、処理

することに、最後に古ぼけた数珠と一枚の写真を貴重品と一緒に身につけることを忘れなかった。これには私なりに深い訳のあることでした。

○月○日 定平小学校にどうやら落ち着いた私たち百名余は、参謀長を中心として一応統制のとれた生活が始まったが、間もなくソ連軍の歩哨が立つようになつた。その事はよいとして、夕食後のんびりとタバコを吹かしながら雑談している私たちの室に銃を持ったソ連兵が三人、土足のままで突然侵入して来た。結果的には煙草を要求して、K大尉のポケットに素早く手をつ突っ込んで奪い、それで気が済んだのか、諦めたのか、その時はそれでひとまず難は逃れることができた。日本人の所持品を強奪するソ連兵のあくどいやり方をいろいろ聞いたが、いよいよ私たちの身辺にもその手が伸びてきそうであるから今後の対策を考えねばならなくなつたが、立場の弱い私たちには予防策などあろうはずがなかった。

○月○日 先日のタバコ被害は私たちの室ばかりでなく、その後引き続いて他の室や校内の各所で似

たような被害が続出した。伝わってきたニュースによると、現在北鮮に進駐しているソ連軍の大部分は正規軍ではなく、極東の囚人で編制した軍隊だということであつた。タバコや万年筆などは序の口で、時計や着ている衣服まで強奪した例は山ほどあつたことは事実である。なお、ついでにソ連兵について述べれば、至つて算数に弱いということで、二列縦隊でも数えるのにかんがりの時間を必要とするということ、嫌というほど知らされたものです。まして四列や八列などとなると、到底彼らは数えることができないと言つてよいのではないだろうか。

○月○日 どこへ連れて行かれるのか知らないが、今度の移動はどうやら相当歩かねばならないらしい。案の定、昼過ぎになつて出発の用意をせよということであるが、行く先や行程はもちろん、出発の時刻さえはつきりしない。荷物は別にトラックで運搬してやるということらしいが、託送する者は一人もいなかった。ともかく歩くことが決まつたことは間違いない。出発を気にしながら校庭に並んで待つていた。やがて

ソ連の將校らしいのが十名ばかりの兵隊を連れてやつて来ると、人員の検査を始めた。やれやれまた面倒臭い人員検査で待たされるのかとがっかりしたが、検査は案外に早く終わったらしく先頭の方からぞろぞろ校门から出始めた。数カ月を過ごした定平の古びた小学校にちよつとした郷愁のようなものを覚えた。どうやら定平を後に北へ北へと進んでいる。「咸興への集結か」「興南から船に乗るんだろう」と内地帰還を前提にした勝手な憶測ひとしきりであった。その間また、ソ連兵が略奪を始めたらしい。「それ！」とばかり前後左右を固めるように歩いた。幸いに前と後ろから二手に別れて襲った彼らには収穫はなかつたらしい。

十一月とはいえ、歩く体は汗でびつしより濡れていた。「咸興が見えたぞー」という声が……。しかし、以前と変わって商品の豊富に並べられている咸興の街の復興の姿を感じる中で、行軍の疲れを感じながらそろそろ夕闇も迫るところ「おい、予定地は咸興じゃないらしいぞ」と……。目標も目的も示されずに歩かされるだけの行軍ほどもじめで辛いものはない。「頑張れ、

頑張れ、これくらいのことではこたれるな」と言い聞かせながら歩き続けた。

○月○日　苦しい夜行軍の末、咸興と興南の間程にある旧日本軍が英軍捕虜のために設けた収容所であつたらしい。天井が低く窓の少ない粗末なものであつた。とにかくここは私たちの長くいるところではなく、どこかへ行くためのものであることは十分察せられた。

○月○日　今晚あたり移動があるだろうという噂が昼間から流れていたので、今まで使い慣れたグループ用の大八車を引っ張り出して整備しておいた。この車は何といつても私たちの移動に欠かせない大切なものであつた。やつぱり噂どおり、夕食を済ますころ出発の命令が伝えられた。門前に並んで待つこと数時間、真夜中過ぎに列が動き出した。

夜が明けて、大きな機械や沢山のパイプが縦横に走っている工場、その名も高い興南にある日本素索工場であつたとか、世界に誇る日本の工業技術の水準をあらためて認識させられた感じであつた。歩いてやがて

「船が着いているぞ……」という声が伝わってきた。

○月○日 岸壁に係留されている貨物船は千ト

ンぐらいで、船名もなければ国旗も見えない黒い船であつた。たぶん収容所にいた連中千名は全部連れてこられたのだろう。やがて、乗船順序や船内での注意が伝えられた。新しい希望に胸ふくらむ思いであつた。

やがて私たちの順番になつて、それぞれ荷物を背負つて、棧橋から甲板まで二十メートルほどあるので、細長い急造のはしごを見ただけでも、揺れるはしごが危なつかしくて、大きな荷物の者ほど哀れに見えた。ようやく甲板に上がり着いたときに、「よし！きた」とばかりに見知らぬ同胞が両側から背中のリュックバックごと引つ張り上げてくれていた。「ジンとくる光景である」と私は感じた。これで北鮮ともお別れかと棧橋の方を振り返ると、だんだんと遠くなつて行く港の屋根は夕日に赤く映えていた。

船は日本海の真ん中に出たのか大きく揺れていたが、いつの間にか寝込んでしまつたらしい。周囲の騒々しい気配に目を覚ました私は、ただならぬものを感じて

夜明け前の甲板に出た。「船が止まっているんだ」「故障か」船は潮流に流されているようにも感じられた。

やがて夜が明け始めたところに、「陸が見えるぞ！」と左舷の方から聞こえた。ようやく見せた陸地は、ついに私たちの期待する懐かしい内地のそれではなかつた。

「騙された」という直観と、ここで降ろされるといふ直観と同時に、これから後どうなるんだろうかという疑惑と大きな不安が突如として襲つてきました。

○月○日 今から我々は下船する、ここはウラジオストツクの西方にあるポセツトという港であると、元軍司令部の高級参謀である○大佐が緊張した面持ちでソ連側の命令を伝え、今こそ忍びがたきを忍ばねばならない運命にあることをよく自覚して自重してほしいという意味の話であつた。船を降りた私たちは、元のグループに別れて岸壁の広場に集まり、枯れ草や木片を拾い集めてグループごとに焚き火を始めた。私たちが下船してからも荷物の陸揚げで思わぬ時間がかかつた。糧秣はもちろん、野戦用炊事具まで積み込んでいたのである。こんなことを初めから知っていれば、

内地帰還の話などだれも信じなかつたはずである。

(二) ポセットの幕舎生活

○月○日 澄み切つた秋空にようやく昇つた太陽の日差しは、冷たい朝風をいくらか和らげてくれた。どうやらこの港から歩かねばならないらしい。足の弱い者や高齢者は先頭の方に集合せよとの指示があつた。千人余りが一本の長い隊列になつて、さほどの厳しい統制もなくぞろぞろと歩くのだから、後尾の方は余程の健脚でなければならなかつた。私たちはほとんど最後尾になつて出発した。

茶色の枯れ草に覆われた茫漠とした丘陵がいくつもいくつも重なり合つて、遠く地平線に続いている。歩く者にとつては一つ一つこの丘を越えて行かねばならないのである。隊列の乱れが目立ち、私たちの前後左右に見知らぬ顔触れがめつきりふえてきた。これが最後の丘だろうと思つて上がりつめて、下り坂にかかる。眼下に湖のような広がりだけが開けているだけで、収容所らしいものは何一つ見えなかつた。道は湖の水際に沿つて左に迂回していた。湖と思つたのは、どう

やら海から深く入り込んだ入江のようでもある。細波一つ見えない黒い水面は、気味悪いほど鎮まり返つていた。先頭はもうその入江の左向こう側に見える丘を上がつていた。疲労困憊した五体を支える最後の力は精神力だけで、延々と続く茫漠の丘陵は、まるで私たちを「これでもか、これでもか」と意地悪くいじめるように、越えても越えても行く手に現れて尽きなかつた。

○月○日 なかば放心したように足を引きずつて小さい丘を越えて間もなく、前方の緩やかな斜面に幕舎の一群が見えてきた。私たちの収容所であるらしい。濃い緑色をした幕舎の群は、黄金色の草原の中に鮮やかに浮き出て美しい緑の村を形成していた。それは砂漠の中に見るオアシスといった感があつた。緑の村に到着して、私たちはその場に倒れるように座り込んだり寝転んだりして幕舎の割当てを待った。幕舎には長方形の大きなものもあれば、小さいものもあり、円錐形のも混じつて形は様々であるが、一定の距離間隔をおいて整然と並んでいた。また、林立するストープ

の煙突は目前に迫るシベリアの冬を連想させた。

ようやく幕舎の判当てが決まり、私たちは一刻も早く手足を伸ばして横になりたかったが、それもできず、間もなく草刈りに後ろの丘へ出かけねばならなかった。それは夜の冷え込みを少しでも防ぐためのもので、毛布一枚を敷いただけでは過ごせないということを参謀長に教えられての作業であった。ようやく日の沈んだ西の空は一段と美しいあかね色に輝き、麓の幕舎は薄いとばりにかすんでいた。

○月○日 ポセットの幕舎に入ってから別れ決まった仕事もなく、毎日ストープの薪拾いが主な仕事であった。しかし、ソ連領に入ってから給食は一層悪くなって、わずかばかりのかゆだけで、いつもいつも満たされない空腹を抱えて身の動きが鈍るばかりか、気力も衰えてくるのであった。

○月○日 薪拾いから帰ると、幕舎の前に敗軍の一団が続々到着しているところであった。この一団は樺太から連れてこられたらしい。聞けば、宗谷海峡から日本海を渡ってポセット港に着いたらしい。彼ら

は日本軍の士官ばかりでなく、樺太庁の高級官吏や判事、検事も一緒であるらしい。兵隊や一般民間人は作業隊としてどこかへ連行されたらしいとのことであった。

○月○日 収容所を転々とする抑留生活が長引いてくると、旧軍隊の階級意識も次第に薄らいでくるものである。そもそも軍隊の階級というものは組織活動上の必要性から生まれたものだから、日本軍の崩壊した現在ではもう必要がないのが当然である。ある日の雑談の中で、お互いを○○さんと呼称することにして階級章を取り外したら、との意見が出た。大多数の者は賛成だったが一部に難色があった。これからいつまで続かわからない集団生活の団結を保って行くための秩序維持ということであった。なるほど一理はあるが、現実はずいぶんその必要性を感じさせなかった。終戦以来、日に次ぐ転落の過程で味わってきた苦難と屈辱の生活で、知らず知らずのうちに人間を信じることを忘れ、卑屈で利己的な人間に改造されつつあって、「衣食足りて礼節を知る」の諺どおり、逆境に立

つとこんなにも変わるものかと驚くほど、ほんのつまらないことで対立することがしばしば起きた。将来の見通しも希望も何も約束されない不安と疑惑の連続の中で、相互の信頼と協力をようやく支えているのは、従来組織でも階級でもなかった。それは、めいめいの心の奥に残っている理性から生まれる人間としての友情と同胞愛であった。

○月○日 朝から吹雪もやんで薄日も漏れていた。朝食後、幕舎前に全員集合させられてソ連軍将校の被服検査を受け、防寒被服が支給された。全部新品であった。ずいぶん気前よく配給してくれるのも当然で、旧日本軍の物で、おそらくは満州の野戦倉庫から押収してきた物だろう。これで冬の用意もできた。いよいよどこかへ移動するのだろう。

○月○日 今日、ソ連軍の作業から帰った同僚が新しい情報を持ってきた。幕舎から約一キロほど離れた所に鉄道の引込線があつて、長い貨物列車が到着して、しかも貨車は全部棚をかけてあるというところだから、人員輸送のものであることに違いない。移

動はすでに覚悟していたこととはいえ、これは相当遠い所へ送られるのではないかと、また新しい不安と疑惑がわいてきたのである。

### (三) シベリア鉄道

○月○日 噂どおり、いよいよ輸送列車に乗り込むことになった。今までどおりの私たち千人余りが一梯団となつて、どこに輸送されることや、今度の移動は大分長い旅になるらしい。大きな五十トン貨車をいくつ連結してあるのか、とにかく物凄く長い輸送列車である。貨車の中央の扉を左右に開くと真ん中にお粗末なダルマ式ストープがあつて、前部と後部に二段の棚をかけてあつた。つまり貨車を上、中、下の三段に仕切つてあつて、各段に、一段に五人はまだいい方であつた。ともかく三人と二人が差し向かいで休むことにした。つまり向かいの戦友の泥靴が私の両肩にくっついているということになる。荷物を整頓して自分の寝る場所がどうか決まってしまうと、やっと気持ち落ち着いてきた。

○月○日 押さえつけられるような息苦しさに

目を覚ますと、ガタガタ揺れる真つ暗闇の冷たい貨車の中に寝ている自分に気がついた。体ががすっかり冷えきっていた。急に小用を催した私は、天井が低いのでやむなく隣のH君を揺り起こした。思いのほか気安く「おれもだ」と言つて先に降りてくれた。不寝番に何時ごろかと聞くと「三時過ぎだ」と、ポツリ答えてくれた。冷たい風が霧になって吹き込んでくる扉のすきまからやつと用を足してブルツと身震いをした私は、もとの棚の上に戻る気にもなれず、ストーブにしがみつくように座り込んだ。

ようやく夜が明けたらしく扉のすきまから明かりが差し込んできた。目を覚ました連中が穴倉のような棚から這い出してストーブの周囲に集まつて来た。だれもが暗い窮屈な塙ねぐらがつかつたらしく、やれやれといった表情であつた。私は、半開きの扉から珍しくもない外の雪景色をぼんやり眺めていた。列車はかなりのスピードで走っている。全く何も見えない渺茫びようぼうとした雪原で、単調な大自然の連続であつた。

○月○日　ぐったり寝込んでいた私はH君に揺

り起こされた。列車が止まったというのである。やがて司令車から、ここからいよいよシベリア本線に入っているらしく約一時間余りの停車をする予定だから下車してもよいとのことであつた。この時とばかりに皆は申し合わせたように貨車から飛び降りると、暗い貨車の下にもぐり込んだ。言うまでもなく生理的欲求の有無にかかわらず、この時を利用してなければ次の機会がわからないからである。真つ暗な貨車の下には煙草の火がいつぱいに点滅していて満員の盛況で、煙草の火は「我れ此処にあり」の標示灯であつた。

○月○日　今日も列車は昨日と同じような雪の原野を走り続けている。シベリアの鉄道を進むにつれて、配給される食事も朝食や夕食やらさっぱり見当がつかなくなつてしまつた。シベリアには昼はないのかと思うほど、いつ見ても外は暗闇のようで、太陽の光を見ることは稀であつた。何時ごろか分からないが、呼び声に目を覚ますと列車が止まつていて、寝不足気味の私は棚から降りる気にならず、うつらうつらしていた。列車の扉の下での話の様子では、どこであるか

さつぱりわからないらしいが、停車場は相当に大きいらしく、参謀長もハバロフスクであろうとの声が耳に入った。だれかが通りがかった検車係に尋ねたらしい、やはり参謀長の推察どおりハバロフスクであった。やがて司令車から、後二、三十分しか時間がないが、隣に停車している石炭の輸送列車からストープ用の石炭を取れるだけ取れということで、千人余りの日本人が石炭車になりたがつて、手当たり次第に服のポケットや上衣の裾などにいっぱい包み込んで自分の列車に戻った。こんなことをを平気でやれるのはソ連軍の威力か、共産国であるからか。

○月○日 列車に乗り込んでからもう十日以上はたっているだろう。顔や手を洗う水もない列車生活で、馬や牛並みに貨車に積み込まれ、干し草の中で寝起きしているのだから体中がもぞもぞしてくるのが当たり前で、ノミやシラミがわいても不思議ではない。

列車の停車したときのひと時に線路わきの雪で手や顔を拭くこともあつたが、大した効果もなく、衣服に至っては汚れているというより悪臭を放つポロ服と言っ

た方がピッタリであつた。

○月○日 下車している者もかなりいるらしい。「バイカル湖」という声が聞こえたような気がして目が覚めた。大体この線路のどっち側に湖があるのかな、まさかこんな所まで来るとは思わなかつたな、この闇夜では何も分らない、起きて見たところで何も知ることができないのだからと思ひ直して、横になつたまままで過ごした。長い列車生活が続くと、不潔な環境と食べ物の変化で、私もまず便秘で悩まされた。つい我慢することがその原因であつたかもしれない。水の補給が十分でないだけに苦しい体調に悩まされた。厳しい喉の渇きに襲われてなかなか眠れなかつた。

○月○日 二十日余りの列車輸送で疲れている私たちの健康管理に、ソ連軍もいくらか気を使っているらしい。この次に停車すると全員入浴する予定であるということ、灰色の粗製の大きな石鹼が配給された。しょっちゅう腹を空かしている私たちだから、伸し餅のように見えて珍しい食料品だと思つたものである。分配係から切り餅ぐらいのを一個ずつもらつた。

これがソ連共産主義国の徹底した合理性というものだろう。要は使つて汚れが落ちればよいわけだ。

身も心も疲労している私たちは、近いうちに入浴できると聞いて救われた気持ちになつたが、はたしてどのような入浴をさせてくれることやら。バイカル湖を過ぎイルクーツクに停車したのがつい二、三日前であつたような気がするが、入浴の設備があるとされる所はどこか？

○月○日 列車が急に徐行し始めた。だけれが出入口の扉を開けたので冷たい風が車内に吹き込んできた。駅構内に入つたらしく、黄色に輝く外灯の下に幾条もの引込線が冷たく光っている。やがて貨物列車の群れの中に割り込んだかと思うと、大きく揺れて停車した。ソ連兵が私たちの貨車の下にやつて来て「ダワイ！ダワイ！」とせき立て始めた。停車時間ほどのくらいあるのか、二列に並んでぞろぞろ歩き出した。

ノボシビルスクという所である。夜空に街の灯を見て駅の構外に出て、家並みの少ない雪道を人通りもない夜更けに黙々と進んだ。ようやく倉庫のような大き

なバラック建ての前に着くと、小さい入口から一列に並んで内に入った。寒い外から来た私たちにはホッとする暖かさを感じた。高い天井から裸電球が三個ぶら下がっているだけで、薄暗いガランとした広い屋内で、奥の角に長いカウンターがあつて、後ろ鉢巻きをした老婦が二、三人忙しそうに働いている。その老婦から太い針金の輪を渡され、衣服の全てを通すよう通訳から説明された。これがなかなか大変である。「ダワイ！ダワイ！」ソ連兵にせき立てられて、せわしくて防寒外套から下着まで一まとめにするのは容易でなかつた。素つ裸になつた私たちはまたもや「ダワイ、ダワイ」の声で隣室へ追い込まれた。立ちこめる湯気にちよつと面食らつたが、空いたシャワーの一つに飛び込むやいなや、頭の方から一生懸命洗い出した。体の石鹸を流し終わらないのにまたもや「ダワイ」である。衣服の消毒が主な目的で、シャワーはその付録に過ぎなかつたのかもしれない。初めから終わりまで「ダワイ！ダワイ！」のせわしい入浴であつたが、体を洗い衣服の消毒ができていくらか楽になつた。しかし腹立

たしかったのは、浴場で防寒帽の肌触りのよかった兎の毛皮であつたのが、真つ黒に汚れた犬毛のバサバサのものに取り替えられてしまつていたことであつた。

○月○日　次の停車駅で糧秣の補給があるので、私が責任者として受領に行くことになつた。各車両からの受領員を連れてソ連兵を先頭に糧秣補給所に向かう。止まつた列車の線路伝いに歩く雪の夜道はすつかり凍つていて、つまずいたり滑つたりして転倒しそうになる。三百メートルほど進んだころ、前方に窓明かりの漏れる建物が見えた。炊事場らしい、バターの匂いが鼻をついた。土間には黒パン、燕麦の袋と一緒に、カーシャ（おかゆ）を入れたバケツが二列並べてあつた。私は、各車両の人員に應じてそれぞれの物を配給し、袋を何人かに担がせて帰らせると、薄暗い角の方に大きな木箱が一個残つていた。見ると、それは日本軍から押収していた「切り千大根」と、日本字で標記してあつた。懐かしさもあつて私は、一人で持てそうにないので周囲を見たが、もう誰も残っていない。責任者の立場から、そのまま放置して帰るわけにはいか

なかつた。後から考えれば四、五十キロくらい大きな木箱を一人で、防寒外套を着たままで担ぎ上げることが精いっぱい、三百メートルの道を真夜中に歩くのは初めから無理なはずであつたのに、私の運命を変える結果になつてしまつた。

炊事車の明かりが見えてやつと、発車されてはとう気が気でなかつた不安から解放された気持ちの瞬間のことであつた。右足を前に踏み出していたが、そこは思ったより低いところで、左足で踏ん張つたが砂利の上であつたのか、石炭の上であつたのか、足を取られて大きな木箱が揺れて体の均整を失つた私は、前にめりに倒れた。夢中になつて立ち上がろうとしたが、右足首がしびれていて思うように力が入らなかつた。気がせいしている私は再三立ち上がろうとしても立てなかつた。右足の異常は骨折か捻挫か、全身の力が抜けて座り込んでしまつた。「オーイ」「オーイ」と、ふとだれかが近づいてくるのに気がついて、大声で呼んでみた。「オーイ！柴田君か」やれやれと思つた私は、もう後は声は出なかつた。帰りの遅い私を心配して獣

医部のS大尉を迎えに寄越してくれたのである。木箱を炊事車まで引きずっていつてから、私を肩に抱えるようにして車両まで連れていつてくれた。貨車の中へ引つ張り上げられた私は、早速靴を脱いでみた。案の定、右足首が大きくはれ上っている。右足関節の外捻挫で、当分動かさないとそつとしておくより手がないとのことになってしまった。近いうちに列車輸送が終わつて下車するらしい噂が流れている折だけに気が気でない。

○月○日 捻挫してからはや数日たった。痛みはいくらか楽になったが、思うほどよくなかなかつた。そのようなときに大変なニュースが車内に伝えられた。あと十日ほどで全員が下車すること、しかもそれから收容所まで雪の中を長時間歩かねばならないということであつた。足の怪我で歩けなくなつた私が、この数日間、思いわずらい気をもんでいた最悪の事態が現実となつて現われたからである。

○月○日 ウラル山脈を越えてから数日後、列車は名も知らぬ小駅にとまつた。吹雪の吹きすさぶ、

とても寒い朝であつた。ついに来るべきものがきた。無常な下車準備の指令が届いた。しかも、ここから二昼夜ほど雪の中を歩かねばならないということである。大陸の厳しい寒さになれない私たちにとつては、まさに「死の行進」を意味するものである。まして歩けない私は、荷物と一緒にソリでということになるとすれば、どういうことになるのだろうか。歩くより凍傷にやられる危険がわかり切つていゝからである。不承不承、下車準備を整えて待つていゝところへ、健康に異常のある者は入院させるから申し出よと連絡があつた。今日まで苦楽を共にしてきた戦友たちと別れて、いづれとも知れぬ病院に入れられるのも気が進まなかつたが、参謀長が私の体を心配してしきりに入院を勧めてくれた。

そんなとき、ちようど外から戻つた軍医のTさんが体の雪を払いながら、「柴田君、君が知つていゝ○○大隊のK中尉も神経痛で入院することになつたから、君も一緒に入院したらどうだ」と私に勧めた。すると参謀長も側のT君やH君たちも口を揃えて真剣に、友

情をこめて勧めてくれた。それから間もなく軍医のTさんが、いかめしい肩章をつけたソ連将校を案内してきた。多分私たちの輸送司令官だろう。私の大きく腫れた足首を見ると、うなずいてT軍医に何かささやいてから出て行つた。これでどうやら私の入院が認められたらしい。

入院患者は全員、先頭の車両に移乗することになつて、T軍医から知らされていたK中尉が私を迎えに来てくれた。さらに、この列車で入院する者だけがどこかへ連れて行かれるらしい。私は戦友たちと別れのあいさつを交わし、お互いの無事を祈り、K君の背中に負われた。病人車と言われるこの車両は、前にいた車両以上に、座つたら最後身動きならない状態で、思ったより多くの患者で大変な混雑ぶりで、暗い車内は喧騒であつた。「とうとう本隊が行つてしまつた」という声が入り口の方から聞こえて、車内は少し静かになつた。やはりだれの心にも本隊との別離に一抹の寂しさを感じたのであろう。外はもう暮れようとして、吹きすさぶ雪であつた。入口にソ連将校が現れて「ガチャ

ン」と外から「かんぬき」をかけた。今日まで輸送中に外から扉の「かんぬき」をかけられることがなかつた。これはどういう訳だろうか。やがて列車は動き始めた。いづこへ送られるも知らずに私たちは、彼らソ連側のなすがままに、奴隷のように身動きもできない車内で、病の身をどうにか保ちながら朝を迎えたい。

#### (四) オルスクの病院

○月○日　すでに止まっている列車であるが、外から扉を閉められている。どうしようもない。間もなく重たい扉が左右に開かれ、ソ連将校が一人笑顔で立っていた。彼の話では、ここで全員下車して病院まで二キロほど歩くから荷物は馬ゾリに積めということである。下車してから知つたことは、私たちの貨車一両だけであつたことである。防寒帽をかむり小さなスキーを履いた子供が二、三人「ヤポンスキー・ハラキリ」と言いながら物珍しそうに側に寄つて来た。これはどうしたことであろうか、日本人の切腹物語としてソ連側に伝わっていることは不思議でならない。

さて、下車して勢ぞろいすると、なんと全部で七十  
六名もいた。防寒外套で着膨れしたこれだけの人数が、  
荷物を持つて五十トン貨車一両に乗り込んでいたのだ  
から息の詰まるほど窮屈であったのは無理もないこと  
であった。歩き出した隊列の後に、私の乗ったソリが  
ゆっくりと続いた。しばらく行くとやや下り坂になつ  
て、前方の丘の上に一風変わった高い建物が、これが  
病院かもしれないと思わせる感じで見えた。近づくに  
つれて、相当年代を経た古びた欧風の立派なレンガ造  
りの建物であることがわかった。しかし外見は、古代  
技術の贅を尽くした立派なものであるが、所々壁が落  
ちレンガが崩れ、窓ガラスの破れたところにはペニヤ  
板やポロ布を無造作に張りつけてあつて、まるで薄気  
味悪い無人の廃屋のようである。まして周囲に張り巡  
らした鉄条網を見ると、病院と言うより監獄と言つた  
方がふさわしい感じであつた。屋内には人の気配もな  
く、私たちの入れられた二階の一室は、高い天井から  
裸電球が一つぶら下がっているだけの十坪くらいの空  
室であつた。

七十六人もの人間がまたもや貨車の中のようにすし  
詰めにされた。窮屈ながらも久々に電灯の下に落ちつ  
いたせいか、皆の顔はいくらか明るくなり、見合わす  
顔の黒さに笑い声さえ上がつて、狭い室内は賑やかに  
なつてきた。しばらくして肩章のない軍服の若いソ連  
人がやつてきて、パンとミルクを支給すると前置きし  
て、明日は病室に入る予定だとの意味のことを伝えた。  
簡単な食事の後は例によつて眠るまでの雑談で、とり  
わけ今晚の話の中心は、ここは本当に病院だろうか  
ということであつた。謎の国、ソ連のすることだから、  
すべての権利を掌中に握られている私たちである、先  
の見通しが暗いのは当然で、私は明日は明日のお天気  
まかせという気持ちを持つように努めた。

○月○日 薄汚い部屋で雑魚寝の一夜を明かし  
た私たちは、階下の一室で一人ずつ所持品の検査の上、  
理髪、顔剃り、入浴、下着、袴下の取り替え、ガウン  
と毛布の支給などがあつた。その後、同僚の通訳が二  
階の病室に案内してくれた。これで手続が済んだわけ  
だから、ゆっくり休んでいいとのことであつた。病室

には二段式ベッドがぎっしり並んでいた。寝心地は、長い列車生活とは雲泥の差であった。

一月一日（昭和二十一年元旦） 私は前後不覚に眠った。一日も二日も眠り続けたような気がした。まだ起きなくてもいいらしい。他にも目を覚ました者がいるらしく、ボソボソ話す声が耳に入ってきた。今日は元旦のようである。昼夜の区別のつかない長い旅のせいで、すっかり日数観念がなくなっている私でしたが、ポセットで列車に乗り込んだのが十二月二日だったから、丸一カ月も列車輸送で日を過ごしたことになる。

一月〇日 入院してからすでに数日たった。部屋の隅で私たち十人余りが雑談にふけっているとき、だれかが出し抜けに「そりゃそうと、ここは一体どこだい」と切り出した。しかし、だれも答える者がいなかった。それを知らうとする意識すらすっかりぼけてしまっていたのである。軍医のNさんだけがソ連側と度々接触するので知っていた。ここはタタール自治共和国のオルスクという小さな田舎町で、ここから汽車

で数時間西へ行くと首都カザンがあるとのことであった。

〇月〇日 せっかくなれてきた病院から、理由の分からないまま突然他の病院に移ることになった。何事も知らされずにソ連の意のままにならなければならぬ私たちの立場だからしかたがない。外はどんより曇った空模様だが雪は降っていない。滑って歩きにくい雪の丘を一行になって登りつめると、麓の雪の中に三角屋根の建物がコの字形に見えてきた。外見は木造バラック式平屋建ての粗末なものであるが、内に入ると荒造りながらペンキを塗り、ペーチカの暖房設備もあつた。前の病院と違ってベッドが整然と並べられていた。病室は診察室らしい室をはさんで両側に外科と内科に分けられていた。私は外科病室のベッドに着いた。

この病院では今までのような気儘な生活は期待できないようである。外科病室付きの、とても目のきれいなブロードの美人看護婦ライヤという小娘がいたが、規則は厳しかった。他の病室への立ち入りが禁止であ

るのに、内科病室にいる和歌山県出身のOさんや大阪出身のKさんたちの顔を見たくて、時間のたつのも忘れて話し込んでしまった。そして運悪く室を出ようとしたところで、病室付きの「キツネ」とあだ名をつけられている看護婦と鉢合わせてしまった。私のガウンの袖を掴んで何やら口やかましく喋りながら、私の病室の方へ引つ張っていった。そのけたたましい声にライヤが驚いたように飛び出して来た。物すごい剣幕でまくし立てていた「キツネ」の口数が少なくなつた瞬間、ライヤは待ち構えていたように大きな目をむいてペラペラとかみついた。「キツネ」はぶつとふくれて去って行った。私は叱られることを覚悟して頭を下げて神妙にライヤに謝ると、彼女は別に何も言わずに頷いて病室に入るよう合図した。しかし、彼女の大きな瞳に涙のようなものが光っていた。私には忘れられない深い印象として残っている。

○月○日 Aさんの作詩で、バイオリンのHさんが作曲した「オルスクの丘の町」という歌ができた。Aさんは元女学校の国語の教師で、胸の病で入院して

いるらしく、いつも顔色の冴えない元氣のない人であった。不運な身をかこつ病床の窓から、吹雪に明け暮れる丘の田舎町を眺めて詠んだ歌詞だった。苦しい環境の中で生まれた歌だけに悲しく胸をうつ曲であった。Hさんの指導で練習を始めると、いつの間にか一人、二人と仲間が周囲に寄ってきて熱が入って歌つたものである。

○月○日 本隊から別れて入院することになつたのは、ついこの間のように思っていたが、このごろは窓からの日差しもひとときわかるく、春のきざしを感じるようになった。月日のたつ早さをつくづく思い知らされたものです。

今朝にわかにはソ連側の命令で近くにある病院に移転することになった。気温がいくらか上がったとはいえず、外は雪降るうつとうしい日が少なくなつただけである。私は、一たん命令が出たからには否応なく従わねばならないことは知り尽くしているが故に、しぶしぶ取りかかった。移動先は病院とは名ばかりの労働者の飯場か、昔のタコ部屋のようなつくりであった。ここでは

看護婦代わりの労働服の雑役婦の老婆二人、エプロンがけて世話してくれた。蒙古系の人種のように思われた。二人の老婆は私のことに気を許したのか、話しかけてきてくれるが、残念ながらうまく答えられない。それでも私の階級や年齢、母と妻の有無のことだけが通じたようである。

彼女たちが石鹼を使わずに薄茶色の水でジャブジャブと洗っているのに気がついた。二人の側に木炭（消し炭）を入れた桶が置いてある。原始的な洗濯法のようである。二人にどうして石鹼を使わないのかと質問してみた。彼女らはうるたるように手を大きく振って苦笑するだけで答えてくれなかった。それは石鹼の配給がないのか、それとももったいないと思っっているのか、戦争の大きな消費の犠牲が天国と自負して表れているのであろうか。労働者の天国だと自負しているソ連の一面を見た感じであった。

○月○日 前の病院ではマリンキー、ライヤという可愛い小さなライヤ（理髪師）が否応なく私たちに剃刀やバリカンを当ててくれたが、こちらの病院に

移ってからはソ連側の要請で、仲間の中から募って散髪役を一名引き受けてもらうことになった。結局年配のBさんが担当してくれることになった。たまに作業に出なかつた私は、Bさんに髭を剃ってもらつた。

この日、たばこの配給と日本新聞が配布された。終戦以来ニュースと活字に飢えている私たちには、有り難いものであつた。が、時にしたがって期待するほどの内容でなかつたので次第に感じるものもなく飽きてしまつた。はつきり言えば、紙面の大部分は共産主義礼賛の幼稚な宣伝文や、わざと反米思想を煽るような低俗な記事ばかりであつたからである。これらはおかしくて真実性がなくて、反抗的な空気を醸し出すような感じであつた。しかし私は、新聞の下の方の隅に、安政以来の大地震として南海地震の模様を報じているのを見逃せなかつた。どうやら南海市は全滅のようだから和歌山市もかなりの被害があつたに違いない。故郷のことを想い、家族の安否が気になって、夜になつてもいつになく目が冴えて眠れないままに時を過ごしてしまつた。

(五) カザン經由で移動

五月〇日　オルスクの駅からソ連の下士官に先導されて旅客列車の最後尾に乗せられて、内地の国鉄三等車と同様二人ずつ向かい合って座り、七十名で貸し切ったことになった。車内はいつにない陽気さがあつた。数時間を経てスケールの大きい駅構内に入り、はるか遠くに駅舎らしい建物があり、その向こうに高層ビルがそびえていた。列車を降りるとまた下士官の先導で広い構内を横切つて駅前の大通りに出た。タタール州の首都カザンというのに人通りの少ない、活気のない陰気な街という感じであつた。

灰色の街の中でとりわけ異様な印象を受けたのは、レーニンとスターリンの大きな肖像画であつた。私たちは駅前通りをすぐ右折して植え込みのある大きな公園の前で休憩し、携行の黒パンをかじつて昼食を済ますと、すぐ出発した。寂しい街の裏通りをぐるぐる歩いて労働者の飯場のような建築現場のバラックが私たちの宿泊所に当てられた。しばらくして私たちと同じ身なりの薄汚い二十名ばかりの面やつれした相当な年

配者ばかりの一団がやって来た。よく見ると佐官以上の高級将校ばかりであつた。この一行はソ連側の調査を受けるため召喚され、軟禁され、調査態度もなだめすかしつ、しつこいもので、肉体的にも相当厳しいものであつたらしい。

○月〇日　どうにか一夜を飯場の土間で明かし、合流した一行を先頭にして暗いうちから出発した。夜も明けて労働服の男女の姿が目につくようになったころ、木造バラックが点在する街はずれに到着した。ここからトラックで移動するらしい。二台の軍用トラックに少年兵のような若い兵隊が五名到着した。私たちの護衛だということである。トラックに分乗して行き先も知らされないまま朝霧の立ち込める郊外の平坦な道を揺られていた。よく繁つた木立の間を通り過ぎたころ、急に脇道に入ったかと思うと右前方に満々と水をたたえた湖がひらけてきた。ところが湖水ではなく河川の氾濫による洪水であることがすぐにわかつた。この地方では雪解けによるこんな洪水は年中行事の一つのようなものだということである。着いた所は人の

雑踏している波止場倉庫のような建物の前で、ここはカマ川の乗船場で、平素はカザンに最も近い所にあるらしいが、洪水のため臨時に設けた場所だということである。

カマ川はカザンから奥地へ通じる唯一の交通輸送路であるらしい。今日は雪解け後の第一便が出航するので特に混雑しているのだということである。私たちと同乗する彼らは皆同じような形の労働服を着て、リュックサックや雑囊を下げ、どう見ても生活にゆとりのある人種には見えなかつた。避難民そっくりの身なりであつた。軍服を着た日本人が珍しいのか私たちの周囲に集まつて来て、隙あらば荷物に手をかけようとするので、全く油断ができなかつた。彼らには窃盜の罪の意識というものは全然ないのか。私たちを護衛するというソ連兵たちは大声で銃を構えて彼らを遠ざけたが、とうとう手に負えないと見たのか、待合室らしい一室の民衆を強引に追い出して私たちを内に入れてくれた。

棧橋が一段と騒がしくなつた。船が着いたららしい。

窓から覗くと大きな汽船がモクモクと煙を吐いて棧橋に横付けになろうとしていた。驚くことに船は千トン級の堂々とした鉄鋼船であつた。そして船腹の両側に大きな水車がついている。一般客に先立つて私たちが乗り込んだ。船室は一番下で、貨物の上といった所で、喫水の浅い川船だからちようど水面と平行していて、外の景色がよく見える広い室であつた。ここは一般客の入室を禁止しているらしい。通路に溢れている乗客がそつと入つてきてもすぐ監視兵に見つかつて追い出されていた。

船が港に寄る度に乗客が増えるらしく通路にあふれ混雑はますます激しくなつて、監視兵が見つけ次第追いついて出していたが、とうとう手こずつたらしく、入口に近い空席を使わせることになつた。通訳のNさんに肩を叩かれ目を覚まされて、一般客が入つて来るようになったから荷物によく注意するようにとのことであつた。船内で第一夜を明かした。私たちと同室の窓際に席をとっている四人の女囚は一番明らかで、ジャラジャラ音を立てる鎖がなかつたら、おてんば娘の旅行グ

ループにしか見えなかった。また、同室にいた軍人（下士官、兵）の家族らしい者たちの内の一組のソ連兵と若い女性がつれ合い、真つ昼間、公衆の中で堂々と示す愛情の表現は、彼らの生活習慣からすれば気にすることではないらしい。兵隊は帰休兵で、夫婦の幸福な姿だと人の良さそうなタタール系の老人が説明してくれた。

○月○日 船は相当上流に入っているらしく、沿岸の風景は相も変わらず広漠とした荒野の連続で、不毛の大地につくられた人工運河を通っている感じである。今晚寄港する港がエラブガという私たちが下船する所であると伝えられた。エラブガは、冬季に入ると積雪と川の凍結で、馬ゾリの外は全ての交通が途絶するので陸の孤島と言われ、ソ連の大きな刑務所があるらしい。同船の囚人も下船するらしい。私たちは刑務所ではないが、収容所（ラーゲル）とはいえ大差はないことだろう。ようやく冬を越したばかりの今なのに、冬になれば交通の杜絶するラーゲルに向かうという事は、来年の雪解け後まで「ダモイ」は望めない

ということを意味しているからである。ラーゲルは相当大きく沢山の仲間がいるらしいのでいくらか安心してゐるものの、複雑な気持ちで下船の準備を始めた。

(六) エラブガ収容所

○月○日 下船してから底冷えのする寂しい夜道を三十分ばかり歩くと、ラーゲルに到着した。ぶい門灯の光の中にほんのりと浮かぶ大きな門扉と高い塼は、これからの苦しい忍従生活を物語っているようであった。真夜中の構内は深い眠りに落ちて深閑とじていた。門を入ったところは広場になっていて、その周辺に一段と黒く見える大きな影は建物のようであった。私たちは門を入ってすぐ右側にある二十坪くらいの土蔵のような平屋建てに入れられた。ここで当分の間、隔離されるらしい。食事も炊事場から運び込まれるから、一切戸外に出てはいけないとのことである。どうも理解できないことであった。

○月○日 夜明け前の薄暗い広場に仲間が大勢集まっている異様な情景に気付いて、宿舍の入口から覗いてみた。ざっと三百人くらいはいるようである。

外套や毛布をまとっている者が多く、ほとんどが座り込んだり寝転んだりしていた。静かで動作もいたって緩慢で、キビキビ動いている者は一人も見えなかった。やがてこの集団は何であるかがわかった。今日の農耕作業に従事する者たちが出発を待っているのだそうである。私たちが間もなく彼らの仲間入りをしなければならぬかと思うと、何だかみじめな自分の姿を見ているようで物悲しくなってきました。

○月○日　私たちは隔離されているとはいえ、それは形式的なもので、ラーゲル内の情報は容易に入手できた。忘れもしない私たちの本隊であったからである。私たちと別れてからの本隊の筆舌に尽くせぬ悲惨な生活。猛吹雪の中を二昼夜もかかってこのラーゲルまで歩いてきた。重なる疲労と寒さと飢えのため凍傷者が続出して、それはまさに死の行軍であつたらしい。しかも、着いたこのラーゲルには当時十分な食糧の準備がなかったために、ほとんど全員が栄養失調におちいり、すでに三分の一の仲間が死亡してしまつたとのことである。

私たちが便乗してきた第一便の船でようやく食糧が補充されたので、やっと食事らしいものがありついたとのことである。今日の健康診断が済めば隔離を解かれ、元の仲間のいる宿舎に配属されることになった。健康診断といつても、旧日本軍の軍医が一人一人に健康状態を聞いて、労働に耐えられる程度を評価するだけのことであつた。診断を受け終えて、私は広いラーゲルの一番奥に幾棟か並んでいて半地下造りの「かまぼこ型」の建物の小さい階段を下りて屋内に入った。

これがこれからの私の宿舎というこらしい。この部屋で最初に知つたのが○○部隊のM中隊長であつた。声を掛けられたものの、毛むくじやらの土色の瘦せた顔を見ただけではだれであるのか、全くわからなかつた。積もる話で、彼の苦勞と一緒にラーゲルの全貌を知ることができた。このエラブガにAとBのラーゲルが二カ所あつて、私の着いた所はBラーゲルといつて小さい方で現在二千人くらいはいるとのこと、元来はドイツ軍捕虜を收容するために設けられたもので、一時は一万人もいたらしいが、漸次減少して、現在は

Aラーゲルにいくらが残っているらしい。

一方日本人の方は雪解け以来各地区から移動してきて増加するばかりだということである。毎日の労働も大部分は農業労働らしいが、近く鉄道建設部隊が編制される噂もあるとか。病人以外は、このラーゲルにいる限り「働かざる者食うべからず」の鉄則どおり、何らかの労働についてノルマを果たさなければならぬとのことである。仕事をするにしても、日雇いの一般労働につくよりも毎日決まった定職につく方が得策であるとか、それには、身についた技術が必要であるらしい。

○月○日 今日のエラブガのラーゲルに来て初めての農耕作業というラポート（労働）に出ることになった。朝のまだ暗いうちに起こされて食堂で食事を済ますと、すぐに門前の広場に集合しなければならなかった。出がけに戦友が、朝の冷え込みが厳しいし、待ち時間が長いから外套を着ていった方がよいと勧めてくれた。仕事の邪魔になると思ひ、そのまま広場に向かった。すでに百名余りが地面に寝たり座ったりし

て待つていた。また各宿舍からゾロゾロ集まってくるところを見ると、今日の作業はかなりの人数になりそうである。服装は皆まちまちで、毛布を頭からスツッパリ被った浮浪者のような者もいる。何のためか、飯盒や缶詰の空きカンを腰にぶら下げている者もいて、うらぶれて弱々しい日雇い労働者さながらの集まりであった。通訳は「人員検査を始めますから早く並んでください」と声をからして整理に努めているが、一向に効き目がない。冷え冷える広場だ。出掛けに外套を勧めてくれた戦友の言葉の意味がようやく分かってきた。東の空が白んできたころ、どうにか四列縦隊らしい形になった。

それからのソ連兵による人員点検がまた大変であった。時間消費がたまらない。ラーゲルを出てかなり歩いてから粗末な木造の民家が並んでいる部落を過ぎると、なだらかな上り坂になっていた。農場はこの坂の上にあるらしい。道の両側は相変わらず雑草の生い茂った広大な荒地であるが、所々に農家らしい一軒家があり、その周辺だけがよく耕されて見事な野菜が栽

培されていた。この三十坪くらいの小さい畑は、農民にとつてはソ連政府から許されている唯一の私有財産だとのことで、この外、豚や鶏なども一定数以内は私有を許されているらしい。だからどの私有地もすべて、コルホーズやソホーズの農地に比べて問題にならないほど手入れが行き届いているとのことである。

主義、思想は異なるとはいえ、自分の物となると大切に作る人間の心理には変わりはないようである。だから坂の中程から、両側の雑草地はジャガイモ畑に変わってきた。坂を登り詰めると物置小屋らしい一軒家があり、視界が一段と開け、うねうね続く丘の稜線がいくつも重なり交差して、はるか遠くの地平線にまで延びていた。小屋を中心に四方に展開しているジャガイモ畑は、果たして何十町歩か何百町歩あるのか見当もつかないほど広いものであった。ソ連の農業指導員からの指示で、小屋の中から壊れかけた粗末な草刈りを一丁ずつ取り出したものの、すぐに仕事にかかるのではなく、相当な時間、道端に並んで仕事の割当てを待たねばならなかった。ノルマのことをいつもやか

ましく言われているらしいが、どんな方法で割り出すのか、その事を思つて気をもむくらいであった。

三百人余りを幾組かのグループに分けて、一人当たり二メートル幅で二百メートル先までジャガイモ畑の除草作業が本格的に始まった。刈り取った草はそのまま踏みつけていけばよいのだが、イモの根元の草を刈るには注意を要した。見回りに来た指導員は、「百姓や」に生まれていくらかなれている作業の跡を見て満足げに「ハラショー」を連発して行つてしまった。仕事の早い戦友の要領の良さも参考になった。畦の草だけ刈つてイモの根元をかぶせるだけということだ。一時間ばかりして休憩していると通訳がやつてきて、あまり早く終わらないようにしてくれとのことである。この社会では、休憩しないでノルマいっぱい時間をかけてゆつくりやるのが一番賢明な働き方だそうである。ようやく日が西に、作業を無事に終えて帰路についた。

○月○日 発電能力が小さいせいか、広いラール内の共同便所に電灯のないのが一番困りものであ

った。五十人くらいは一度に入れる大きな便所だが、大小使用区分がない上に、左右の仕切りも申しわけ程度に低い板を張つてあるだけで、夜になるとよくトラブルが起きたものである。カマ川の汽船の便所でも驚かされたが、大小共に仕切りがなくて、丸い穴が開けられている所に照準を定めて用を足さなければならなかったことを思い出したが、ここでの真つ暗闇の便所では、手探りでそろそろと相当気を配らねばならなかったし、互いに声を掛け合つて所在を確かめてから実行に移つたり、灯り代わりにタバコを吹かして自分の所在を示す必要があつた。しかし、大勢の中にはピントの合わない者もいて、ギリギリいっぱいまで辛抱した挙げ句、声を掛ける暇もなく放水する慌て者もいて、笑えぬ問題が起きたこともあつた。

(七) A ラーゲルに移転

○月○日 今日、突然Aラーゲルへ移転することになった。話によると、Aラーゲルは現在のBラーゲルよりは大きく、建物も立派で設備もよいことである。めいめいの荷物をまとめて広場に集合して出

発を待つものの、幾千人もの人員を点検しながら逐次出発するのだから相当な時間がかかつて、待つているだけでもくたびれてしまった。

今、作業隊の兵隊たちがハバロフスクの奥地で苦勞しているということを、最近その地域の作業隊長をしていた将校たちが、その役を解任されてこのBラーゲルに来たということを耳にしたばかりであるのに、将校だけが先にダモイなどととても考えられないし、夏も過ぎようとしている今ごろ、更に設備のよいAラーゲルに移るということは、ソ連側は私たちの越冬を考えての処置だと私は思つた。

○月○日 エラブガのまばらな民家の通りを抜けてAラーゲルの正門を入ると、噂のとおり中央の広場を囲むように、鉄筋というのかレンガ造りというのか、大小様々の形をした頑丈そうな建物が建ち並んでいた。Bラーゲルのような応急造りの粗末な半地下式建物とは雲泥の差である。大部分は革命前の建物らしく、外見はかなり手の込んだ建て方で、昔の建築文化の名残をとどめていた。話によると、教会に附属した

学校の跡だとのことである。そういえば、所内の一角にロシア正教の独特の教会堂「ネギ坊主」の形をした黄金色の塔が三つ、夕日に輝いていた。

宗教を否定したロシアの共産革命は豪華をきわめたであろうこの教会を取りつぶして、現在のラーゲルに使用しているわけである。私たちに割り当てられた室は一番大きい二階建ての一室で、地下は炊事場と食堂になっていた。移転と共に人員の入れかえがあつて、室内にはかなり年配の馴染みのない顔ぶれがまじつていた。私の隣は秋田県出身のH君で、航空整備隊の少尉で、小学校の先生をしていたらしく、すぐに親しくなれた。室ではグモイ談義に暇をつぶすよりも、一番大切な自分の健康をどうして保つかを考えねばならない。故国に持つて帰ることのできる唯一の土産はこの体であると考えた私は、H君の共鳴を得て、毎朝冷水摩擦を実行することにした。

○月○日 秋の気配を肌を感じるようになってジャガイモ掘りが始まった。もう収穫期に入ったわけで、冷雨の降る日が続くので、ソ連側は採り入れを急

いで毎日大勢の仲間が狩り出され、雨と泥まみれの作業が続く日が多かった。つらい作業であつたが、収穫したジャガイモの恵みというか、これまでのオートミール（燕麦）や、エンドウに代わつてジャガイモばかりになった。量としては、そのころは「質より量」の私たちには満足感があつたが、毎食毎食のイモにはまいった。

収容所内で掲示される壁新聞は、なかなか人気があつた。ソ連側の積極的な指導による壁新聞に刺激されたかのように、様々な文化活動がにわかに盛んになつた。音楽、演劇、彫刻、絵画など同好のグループが生まれ、先の社会で活躍していた専門的学識経験者の講演会が毎晩のように開催されるようになった。昼間のラポートに疲れていても、貴重な紙と鉛筆を持つて講師の宿舎に出かけたものである。元日本軍将校と政府関係者との一万人近い集会であるから、政、財、教、医、学界はもちろん、スポーツ、芸能、報道などの有名人もいて、立派な社会が構成できるほどであつた。これら各界の先輩たちの話は、若い私たちには興

味深いものばかりであった。

○月○日 被服関係の定職につくことを決心した私は、十名余りの仲間たちと衛兵所前で人員点呼を受け、所外の仕事場に通うことになって、毎日、白いカイゼル髭の監督で、階級章のない軍服を着て軍帽をかぶった爺さんが迎えに来てくれる。仕事場はラーゲルの近くにある小さな建物内であった。敷布と枕カバーの製作であった。隣室では二人のドイツ人が縫製作業をやっていた。技術は相当なものしかつた。ここに通っているころ、かねてから噂のあつた家族への通信がようやく許されて、一枚ずつの通信用紙が配布された。ソ連当局の検閲があるから開封のまま出せとのこと。皆の表情には、めつたに見られない喜びの色がうかがわれた。この一枚の小さな紙が、終戦後ブツツリ消息を絶ち、生死も行方もわからなくなつてしまつた私が生きている証拠としてわが家族のもとに届くのかと思うと、安堵の胸をなでおろしている家族の表情が目に見えるようであつた。

○月○日 毎日のように粉雪が降り続ける。め

つきり寒さが身にしみるようになり、二度目の嫌な冬になってきた。聞くところによると、ソ連領の日本海の港は十二月に入ると凍結するので、船の出入りは一切できないらしい。米春の雪解けまで張り合いのない、むなししい心にムチ打つて頑張らねばならない。

昭和二十二年一月一日 今日には戦後二回目の元旦でラポートが全部休みとなり、何となくのんびりした空気が漂っていた。今年は、前年のオルスクでの正月に比べていくらか落ち着いた気分が新年を迎えた格好だが、一層故国への思慕の情がわき上がつて、故郷での正月の記憶と重なつてよけいに暗い気持ちになり、現実の今日を心の底から喜べないのである。それでも各室では楽しい催しを計画して、日ごろのうさを晴らすことにした。本格的な冬に入ると厳しい寒波と吹雪の日々が続いて、屋外で働くことはほとんどなく、夜とも昼とも区別のつかない、うっとうしい生活が始まるにつれて、夕食を済ますと各室ごとにいろいろな催しをして気分を転換をはかるようになった。このころでは面白い講談や漫談、寸劇などをやる有志があらわ

れてなかなかの好評であった。

あるときは、だれが依頼したのか産婦人科の先生の講話を一時間余り拝聴したが、噂に違わず豊かな経験とユーモアをまじえての上手な話ぶりにすっかり聞き惚れて、時のたつのも忘れてしまった。彼の風体は眼光鋭く、ずんぐり肥えた色の黒い達磨のようで、お世辞にもスマートとは言えないタイプの先生であったが、「婦人の妊娠兆候を早く見分ける方法」について、その実験を東北大学で高松宮殿下に説明申し上げたとのことである。

○月○日 人間は、これでもか、これでもかと言われ苛まれると、生きるための欲望が先に立って見栄も外聞もなく、見苦しい言動に走りがちなるもので、「衣食足りて礼節を知る」の言葉通り、ラーゲル生活が長くなるにつれてそれぞれの生活態度にも変化が目立ってきたのである。私たち仲間のほとんど全員はそれ相応の教育を受け、教養を身につけているはずの日本軍将校や政府高官で、かつては人の指導的立場にあった人たちがかりであるから、大部分の者は言葉の

端々にもジツと耐えている底力のようなものが感じられた。ところがこのころから僅かながら、あの人はどうしてあんなになつてしまったのかと考えさせられるほど人が変わつて、人間の醜い面をなんの恥じらいもなく剥き出しに表す者が出てきたのである。それは、コッソリとソ連側に通じて仲間を売つたり、密告して当局の歓心を買う者たちであった。仲間を陥れてでも我一人要領よく利口に立ち回ろうとする悪賢い奴である。またこれとは反対に、病気でもないのに廃人のように痴呆化して、野良犬みたいに所内をウロウロする者や、他人の衣類や食べ物を黙って失敬する奴らであった。これらを見て、もはや過去の学識でもなければ地位や権力でもなく、お互いに深く秘めている理性なり強固な意志より外に何も無いことを教えられた。

○月○日 私たちの最も恐れていた発疹チフスが発生し、隔離患者が日に日に増えてきた。とにかく非衛生に陥りやすいラーゲル生活につきものと言われる伝染病であり、シラミが原因である。

ソ連当局もかなり神経を使っていたが肌着を調べる

程度で、根本的な予防処置が講じられなかった。今更  
騒いだところで後の祭りといった状態であった。その  
ようなときに自分でも原因が分からない発熱に襲われ  
た。発疹チフスの蔓延している時なので、意を決して  
隣のA君に伝え、医務室に走ってもらった。どんどん  
熱が上がるばかりで三九度に達していた。そのことを  
軍医から聞き、型通りの診察を済ますと、「チフスの  
疑いがあるので隔離せんならんかもしれん、だが  
……」といくらか希望のありそうな言葉を残して出て  
行った。しかしそれは一時の気休めで、私には死の宣  
告に聞こえた。病院からの看護人に迎えられ、寒々と  
した一室で病院の肌着に替え、私の衣服は一まとめに  
して保管してもらった。

バケツ一杯の湯と大きなタライが準備され、ソ連の  
しきたりどおりに、少々酷だと思ふ湯浴みだが、ブル  
ブルとふるえる私の背中を親切に流してくれる看護人  
を見つめた。案内された病室に入った私は、ゾツとし  
て思わず立ちすくんだ。もうこれ以上手の施しようも  
なく放置してあるといった状況で、室内に充満する呻

き声は生きながらの地獄絵図で、とてもまともに見る  
ことができなかった。私のベッドは病室を通り抜け、  
廊下にはみ出した格好で窓側にあつた。

ようやくベッドに横たわり、ガタガタと震えてくる  
体を毛布にくるまって、もうどうしようもないんだ、  
なるようにしかならないんだという諦めのような度胸  
が出て、不思議なくらい気持ちが悪落ちてきた。熱  
があるため目がかすみ、だんだんと意識がもうろうと  
して、夢とも現実ともわからない境地をさまよって  
るのがよくわかり、このまま死んで行くのかもしれない  
いとさえ思っていた。訳も分からない幻覚を追って  
いるうちに、ふと母の顔を見て「どんな時でも仏を念じ  
よ」と言ってくれた母の言葉を思い出して、そつと手  
を合わせた。すると次第に気持ちが落ち着き、自分の  
死を冷静に直視できる私になってきた。もう日が暮れ  
たらしい。全身が寝汗でグツシヨリだが、眠ったら  
しい東京での思い出であり、長崎で過ごした休暇の一  
日がよくもなく次から次へとよみがえるにつれて、悔

いのないわが青春に自ら心がなごみ、短い生涯であったが祖国に一生を捧げた我が人生も、結末はともあれ、精一杯に尽くして来たことにほのぼのとした満足感さえ湧いてくるのであった。

目が覚めると薄日の差す窓ガラスが目についた。昨夜の重苦しさや熱っぽさも、けだるさもうそのように消えていた。チフスの熱であればこんなに早く下がるはずはないのではないか、一度よく診察してもらわなければと。そこへ看護人が体温計を持って来て、昨日と打って変わった私の様子にびっくりした表情で、朝食を持つてくることを約束した。チフス患者と一緒にされては大変だと心配になってきた。体温は三十六度、軍医の回診を神妙に、私の生死を決する重大な審判を受けるような気持ちでその時を待った。結果は、ソ連軍の女医と日本の軍医との二人連れでの診断によりマラリアかもしれないとして、血液検査のため耳から血を採取して行った。間もなく看護人からマラリアであったことを知らせてくれた。その後のマラリア病棟では、力強い生命力のようなものが室内にあふれていた。

二週間の入院で、元の宿舍でない所に移った。春の太陽が輝いていた。

○月○日 内地から返信の便りが届いて、その度ごとに「今日こそ」「今度こそ」と期待に胸をはずませたが、自分一人が取り残されるようで寂しくもあり、無性に腹立たしくもなつて、嫌になつた。

届けられた内地からの便りには嬉しい便りばかりではなく、書けない、伝えない、何か複雑な事情が絡んでいるのかもしれない。待つても待つても便りの来ない私には、結婚式を挙げただけの生死不明であった私の独りよがりだが、妻の身にとってはいかに私の我儘で残酷であつたかということ、昨年末許されて書いた最初の手紙が妻あての手紙であつたことが今更に悔やまれてならなかつた。

○月○日 心待ちにしている妻の返信がまだ届かないうちに、第二回目の通信が許された。すでに便りを受け取った者が多いせいか、昨年末の時ほどの興奮は感ぜられなかつた。私の心はよけいにいら立つた。あまりにも遅すぎる返信に、妻の身辺に何かが、とい

う懸念が一番大きかったからである。通信紙を前にして、いま一度「妻へ」とするかと、いろいろ思い煩ったあげく、意を決して実兄あてにペンをとった。この二回目の通信を先月出して、○月○日の夕食前のひと時、仲間たちと今日のラボートの厳しかつたことを話し合っていた。出し抜けにBさんが皆の話を折るように、壁新聞に内地からの便りについて私の氏名が出ていたと言うのである。夕食を済ませて食堂を出ると一目散に壁新聞に走った。

受け取った内地の便りは、汚れてよれよれになった一枚の葉書であった。差出人はまぎれもなく、懐かしい妻からのものであった。期待と不安でふるえる胸を抑えながら見覚えのある筆跡を追っているうちに、胸の鼓動はおさまり、明るい希望の光を感じてきた。おそまきながらも妻の便りを見て安心したのであるが、先月第二回目の実兄あてに出した便りを、妻がどんな気持ちで読むだろうかということが気掛かりで、皮肉なすれ違いが悔しく思われてならなかった。

○月○日 今晩は食堂前で盛大な盆踊り大会が

催された。長い抑留生活で沈滞した私たちの気持ちを解きほぐそうという考えで計画されたものらしい。

夕暮れが迫ると早くも楽団の軽快なメロディーが流れ出した。演芸部が人寄せに乗り出したのである。

「東京音頭」に合わせて踊りの輪は次第に小さい輪から二重、三重の大きなものになっていった。日が暮れてラーゲル内によく陽気なお祭り気分が見なぎってきた。一つに解け合って踊っている和やかな情景は、ほほえましい心の温まるものであった。どこで、どうして都合してきたものか、和服姿や洋装の美人があらわれて、盛んな拍手を浴びていた。夏の夜のきれいな星空の下での盆踊り大会は、踊る者も見る者も、しばし日ごろの「ウサ」を忘れ、ラーゲルを忘れさせて、日本人の故郷へ誘ってくれたのである。

○月○日 一度かかったマラリアが再発した。

また入院する羽目になった。夕方から熱が出た。マラリアだと分かっていたのであまり不安でなかったが、夜の更けるにつれて熱が上がり息苦しくなってきた。献身的な看護人にぼんやりした意識の中で感謝しながら

ら、うなされるままになっていた。いつの間にか眠つたらしく、目を覚ましたのはもう翌日の昼前で、熱は下がっていた。肺炎の併発を心配して一晩中看病してくれた看護人が、側についてくれていた。見知らぬ私のために親身も及ばぬ世話をしてくれた看護人に、言い尽くせぬ感謝の気持ちで胸の詰まる思いであった。

一週間余りで退院することができたが、例によつて退院患者ばかりの宿舎に移され静養ということだが、一步も外に出られない窮屈な生活も案外楽ではなかった。隣のOさんの、戦後の日本の建設関係の抱負について、ある日の寝物語に聞かせてもらった。

戦後の日本は海外からの引揚者もあつて人口が急増し、狭い列島に住まねばならないのだから、当面する国民の衣食住問題の中でも、住宅関係は最も解決のむずかしい問題である。日本は宿命的に土地不足という難問を抱えている。将来は山を崩し沼や海を埋め立てて宅地を造成するようになるだろうが、土地の値上りは必ず続くはずだから、土地を買っておくことは堅実な金儲けの手段だというのである。とりわけ田舎の

不毛の土地や沼地を安く入手するのが得策だとのことであった。アメリカにはすばらしい機械ができていますので、やがて日本にもその機械が入ってくるだろうから、土地造成は朝飯前になると言う。話が大きいので夢のように思えた。隔離宿舎から解放されて元の宿舎に戻ったところは、夏も終わり、朝夕の空気もめっきり冷たくなり、冬が駆け足でやってくるのがこの地方の特色である。収穫が始まり、ラポートも日増しに多くなってきた。私たち被服工場の者たちもジャガイモの採り入れに狩り出されることがあつたが、ソ連当局に農作業の免除を申し入れたら聞いてくれた。

#### (八)ダモイ(内地帰還)

○月○日 秋風に枯れ葉が舞い始めたころ、またもやダモイの噂が流れ出した。何事にもすべて懷疑的になつていた私たちである。ましてこの多忙な収穫期に流れる噂は、ダモイと称して他のラーゲルに移動させるソ連の常套手段であるという考え方もあつて、案外だれも深い関心を示さなかつた。毎日のように被服工場の仕事に出るため、営門前で仲間たちと一緒に

髭のスターリッシュ老人（監督）の迎えを待つていた時であった。

當門の近くにある医務室の入口に人が並び始めたかと思うと、見る見るうちに長い行列ができてしまった。定期診断でもなさそうだし、列の一人に聞いてみると、ダモイの健康診断を受けよと言われて喜んでやってきたのだというが、本人も半信半疑で迷っているようでもあった。私たちには寝耳に水の話なので、ぼやぼやしていたら取り残されるのではないかと驚きもしたが、ソ連当局のやり方に少なからず憤慨したし、十二月の海の凍結を思えば港の閉鎖が懸念されると聞いていたから、早く帰還者リストに上げてもらわないと、ということをし、ちょうど迎えに来たスターリッシュを囲むようにして医務室前の様子を話し、彼に懇請した。私たちのダモイについては何も知らなかったらしく、びっくりしたようだったが、すぐに「お前たちの話はよくわかった」というふうは何べんも大きくうなずくと取りあえず工場へ行くように命じて、引き返して行つた。工場に入つてからも、宿願のダモイ話にだれだつ

て興奮せずにはいられない状態であつた。しばらくすると老スターリッシュがやつて来て、すぐ仕事を止めるように命じた。

「いよいよダモイらしいからこれから医務室へ健康診断を受けに連れていってやる」とのことである。ダモイの真偽を彼に賭けるような気持ちで待つていた私たちは、彼の口から直接その言葉を聞いた瞬間、跳び上がつて歓声を上げた。医務室の前にはまだ長い行列が続いていた。スターリッシュは入り口に群がる人波をかき分けて医務室に入つていったが、しばらくすると出て来て、私たちを室内に呼び入れた。彼の助言で、行列の診断を中断して先に受けることになつたらしい。長い列の中から途中の割り込みに不公平のざわめきが起きたが、いかめしい髭の老スターリッシュの手前、すぐにおさまつてしまった。私たちの診断を受ける間終始立ち会つていてくれたが、全員が最後の言葉を残して、白い髭の老スターリッシュはラゲルを出て行つた。「日本までの旅は長いから健康に十分注意す

るように」との意味らしかった。言葉はよく通じないが、彼の心根はよく分かり、感謝の気持ちで後ろ姿を見送った。

○月○日　ダモイの健康診断を済ました者は、自分の荷物をまとめて別に宿舎に集合して待機することになっていた。いつ出発するかわからないから外に出てもいけないということで、戦友たちとも別れを惜しむ暇もなかった。今年の送還に間に合わない者は来春の雪解けを待つてということらしいが、残ると今出るとでは地獄と極楽ほどの大差であると思えた。あわただしい準備をしているうちに、日が暮れても出発する気配がないままに時を過ごし、もう整理の致しようもない荷物を引き出して、なけなしの荷物の整理を始めた。携行する荷物は、内地に帰れば不要と思われるものばかりであるが、これから冬にかけての一月余りの長い旅を考えると、安易に処分するわけにもいかなかった。不思議と愛着のわくものばかりであったが、その中から一足の防寒靴下が出てきた。私が暇を見つけて丁寧につくろつてきたものである。

ふと私は、今入院中のT君のことを思った。北支部隊の勤務時代から苦業を共にしてきた彼とこのままの別れでは情けなかった。せめて私の気持ちとして、この靴下を彼に届けてもらうことを心に決めた。この事の成否は、頼んだ人の有り難い誠心のすべてに頼りなかった。

○月○日　やがて出発命令が出て間もなく着いた所は、前にいたBラーゲルであったのには驚いた。ここで四、五百名の梯団を編制して出発するのであることがやっとわかった。このように全く何も知らせず私たちを動かすのがソ連のいつものやり方であった。人間の当然の心理として、このような時には憶測を重ねる結果となり、流言が乱れ飛び、まただまされていふのだという懐疑的な考えを持つ者もいれば、信じられないソ連に対する憤りを空に向かってぶつけている仲間の姿も見た。

○月○日　いよいよ出発命令が出てBラーゲルを出た時は日もすっかり暮れて、暗い夜空に小さい星が光っていた。黙々と進む四列縦隊の靴音は気のせい

か、活気があるように思えた。疑惑の念がすっかり晴れたわけではないが、一応ダモイへの第一歩でもあり、しかも船便を利用するらしいので、危惧していた二昼夜余りの徒歩行進を免れたという嬉しき、喜びもあつたからである。

丘のふもとの暗い道は、農作業や波止場作業のために幾度も通つた凸凹道である。しばらくすると先頭の方から小声で伝言が流れてきた。右側の丘はラーゲルで死亡した同胞たちの埋葬地だから、歩きながら各自黙禱して別れを告げてほしいとのことであつた。夜空に一段と黒く浮かんでいる丘の稜線から、同胞たちが羨ましそうに見送つているであろう。この地で生涯を閉じた友への冥福を祈る、しばしの黙禱であつた。河岸の波止場にはもう船が着いていた。船体は闇夜を通して一段と大きく見えた。間もなく乗船を命じられたが、船室はすぐ満室になつて、上甲板までいっぱいになる始末であつた。船は暗い川面を静かに下つていくようだが夜が更けるにつれて冷え込みが厳しくなり、私は毛布を頭からすっぽりかぶつた。私はジツと目を

閉じてこの度の移動が本当のダモイであることを祈つていた。

夜明けにはほんのりと霧のかかった波止場に書いて、下船命令が出た。カザンの港らしいが、肌寒い河岸にはまだ人影はなく、深い眠りから覚め切らない静かなたたずまいであつた。予想どおりここでシベリア鉄道に乗り換えるようである。口が昇り霧も晴れてきたころようやく温かい朝食にありついて舌つづみを打つてみると、長い貨物列車が近づいてきた。幸い今回はダモイという希望があり、冬とはいえいまだ雪の見えない時期であるので割合に皆の表情は明るかつた。乗車区分が決まるとすぐに乗り込んだ。車内の構造は前回と変わりなく、前と後ろに各々二段の棚で、各自の荷物が少なくなつていくせい、いくらかゆつたりであつた。

窮屈ながらもどうにか車内に落ち着いたが、まず一様に口をついて出た話の焦点は、この列車が果たして東に向かつて走るのかということであつた。まことのダモイであるならば、当然列車は東へ向かつて走るは

ずである。過去の抑留生活の中で培われたソ連に対する不信感がまたもや頭をもたげてきて、新しい不安を覚えた。間もなく列車は引込線から本線に入るや、次第にスピードを上げて走り出した。扉の隙間から、晩秋の荒涼とした原野が見えるだけで、どの方向に走っているのか、皆目見当がつかなくなった。一同は薄暗い車内で不安げに押し黙ったままであった。ガタガタ揺られているうちにすっかり眠り込んでしまったらしい。

すでに日が暮れていて何という駅かわからないが列車は止まっていて、騒々しい人の気配に目を覚ました。やがて車両から、情報がわからないが、列車はウラル山脈を越えたのか越すところなのか、ちよつと曖昧だがとにかく東に向かっていることだけは間違いないらしい。

○月○日 明けても暮れても茫漠とした広野を走り続ける列車は、名も知らぬ駅で止まって、久々に下車の許可が出たので「ソレット」とばかりに車外に飛び降りた。何日ぶりかで大地を踏みしめ思い切り手足を伸ばし、ようやく生気を取り戻した。外の気温は思

いのほか冷たかった。車内に戻った私は、反対側の扉を開いて何気なく外を眺めていると異様な人の列を見た。数メートル置きに銃を構えたソ連兵がついている。どのような罪に問われた者たちか知らないが、四人ずつ腰を鎖で繋がれた千人くらいはいると思われる囚人の長い列であった。聞くところでは、ソ連は目下シベリアや樺太の開発のために政治犯や反戦主義者などの囚人を送り込んでいるとのことである。私はこんな光景を見るのは初めてであった。世界に誇る民主国家と自賛している国の実態の裏側を見たような気がした。

○月○日 オムスクで食糧補給した日はまだ白い雪景色は見られなかったが、バイカル湖を過ぎるころからは、激しく雪が降り、茫漠とした荒野はすっかり雪景色に変わり、ハバロフスクに着いた朝などは猛烈な吹雪で、薄暗い車内でジツと外の様子をうかがっていた。

間もなく列車が動き出して広い構内を徐行していた。突然に仲間の一人が「日本兵がいるぞ」と叫んで扉を開いた。吹き込んできた雪をかき分けるように外を見

た。ゆっくり通り過ぎている隣の無蓋車の上でうごめいている痛々しい人間の姿が見えた。まぎれもなく日本軍の軍服をまとった日本兵であることがわかった。「頑張れよ」「もうすぐ帰れるぞ」と口々に私たちは激励の言葉を送ったが、側を通り過ぎる私たちを無視したように黙ったまま働いていた。何の反応も示されなかったことがとても残念に思えた。

もうとつづくに兵隊たちは内地に帰っているものと思つていた私は思いがけない情景を見せられて、またもやソ連に限り無い憤りを感じた。

○月○日 夜明け前の真つ暗な闇の中で列車が止まると、突然下車命令が出た。車外に飛び降りた。ナホトカだとのことだが広い原つばのようなところで、港らしい気配は感じられなかった。

雪は止んでいるが、夜の冷気は厳しく草むらの雪は固く凍っていた。夜が明けてから近くにあるラーゲルに入るらしい。いらいらしながら待つこと久しく東の空が白み始め、周囲の様子がぼんやり見えてきた。百米ートルほど前方に静かな海が開けていた。

ナホトカのこの海を遠く取り囲むように小高い山並みが夜明けの薄闇の中にかすんで見えていた。しかし湾内にはそれらしい船の影も棧橋らしいものも見えなかった。思えば、今見るこの海が懐かしい。二年ぶりである。日本に続いているのだと思うと故郷を身近に感じて、ほのぼのとした希望がわいてきた。

いよいよラーゲルに入るらしい。このラーゲルに入つてみて分かったことは、日本人の民主グループが自主的に管理していて、私たち旧将校に対する風当たりが相当に敵しいということであった。ラーゲルの門に入る間に、彼らから、赤旗を先頭に労働歌を合唱しながら通れとのきつい指示があり、民主グループから借りた歌のメモでにわか勉強をして、歌にならない声を出して門を通過したものである。すぐに宿舎に入るのかと思つたら、中央の広場に集合させられた。やがて旧日本兵の軍服を着た青年が現れて、大きなしわがれ声で怒鳴り始めたが、時々「日本軍閥」とか「貴様ら将校たち」とかいう言葉が耳に入ってきたから、私たちをこきおろしていることだけはわかった。私たち

は神妙な態度で聞き流していた。

やつと演説が終わって宿舎に入ることになった。せいぜい百人くらいしか入れないので、約倍ほど人数が割り当てられたので大騒ぎであつた。突然入口の方から民主グループの一人が大声で怒鳴りながら人垣をかき分けて入ってきたのである。「狭ければ狭いなりに工夫せよ」と言うのである。こんなことぐらいお前たちは気が付かないのかとぼろくそで、全く形なしであつた。粗末なバラック小屋は真中を通路にして、両側に棚をかけて上段と下段に分かれていたのであるが、上段をまず病弱者と年配者とし、若い者は下段の床下にもぐれといふのである。床下にもぐつた私の頭の上でガンガン響いていた声が、ようやく一通りの文句が終つたらしく言葉をやわらげて今後のスケジュールの説明を始めた。ここには三つのラーゲルがあるらしい。

第一は、ここにいる限りはラポートの割当てがあるとのこと。次の第二は、被服などの支給を受けてから第三ラーゲルに入つてソ連の復員式を済ませて帰還船

に乗り込むという順序のようであるが、私たち将校は私服用が原則なので被服の支給を受けずに直ぐに第三ラーゲルに入るとのことであつた。ところがこの一週間ばかりの帰還準備中に、いつ何どき、反動者と見られて再度奥地へ送り返される者が出るかもしれないとのことである。だがどこでどのように私たちを監視しているかわからないだけに、全く気味の悪い話であつた。夕食らしいものが配られているようだが、今朝からの出来事のショックのせいで余り食欲がないまま、床下でグツスリ眠りたかつた。ところがまたもや屋内に大声が響きわたつて、全員近くの列車から燃料用原木をおろせという命令であつた。

私はしかたがないので床下からはい出して皆と一緒作業場に向かつた。日は暮れて暗い空から雪がチラチラ降つていた。

○月○日 狭い床下でまんじりともしないうちに夜が明けてしまった。朝食後早々にラポートの割当てがきた。ラーゲルの出口の混雑の中で周囲の様子を初めてながめ回しているときに、民主グループの一人

と話をしながら近づいてくる背の高い将校が目につい

た。見覚えのある顔だが名前が浮かんでこない。やつとのことで、北朝鮮の司令部で勤務していた時のK軍医であることを思い出した。Kさんも気付いたらしく驚いたように駆け寄ってきた。二年ぶりに再会した二人は手を堅く握り合って、しばらく交わす言葉もなかった。私がそろそろ門を出なければならなかったのその後の消息を話す時間がなくて、後日を約したが果たせなかった。別れの際の言葉は、私たちの行動に対する民主グループの態度はかなり敵しいだろうが、わずかの期間だろうから辛抱しろということであった。この言葉はナホトカでの最高の言葉であったかもしれない。

今日の仕事はソ連兵宿舎での薪割りであった。ノルマもなく時間いっぱいには適当に働けばいいので気楽であった。仕事帰りに、口々にきれいな日本語で叫びながら手を振り笑顔で送ってくれた白系ロシア人の金髪の子供たちや、建物の陰から手を振って笑顔で送ってくれた顔、顔が今も印象深く残っていて忘れられ

ない。

○月○日 今日から第三ラゲルに移るようになった。窮地をようやく脱した、やれやれといった気持ちであった。久しぶりに床上で手足を伸ばすことができた。少しでもよい印象でというソ連側の魂胆かもしれないとも思われた。ここでの復員式は、広場に集合した全員に対し、ソ連軍の将校が、私たちへのねぎらいと別れの言葉から始まったが、今更どのように丁寧な挨拶を贈られても、苦しい抑留生活の中で受けたしこりはそう簡単に洗い流せるものではなかった。

復員式が済むと荷物の検査が始まった。税関の検査場のような所で一人ひとりの荷物を開いて詳細に調べらるらしい。文書類は一切携帯禁止なので、どうしても必要なものは許可を受けよとのことであった。私はあれこれ考えた。二年間の生活記録や心に残る戦友たちの住所録なども全部廃棄することにした。無理をすれば検査官の目をのがれることができるかもしれないが、身を張るほど重大なものでもなし、万一発見された場合の馬鹿らしさを考えて思い切って、痛切な思いを残

してナホトカの港の砂浜の土奥深く埋めて別れた。

しかし、エラブガの病院に入院中のTさんから託された約束だけはどうしても果たさねばならないと心に決めていたので、彼のお母さんの住所を即座に暗記して、ようやく無事に検査を済ませた。

○月○日　夜明けを待ちかねていたかのように、帰還のための出発準備の連絡があった。日本の船が入ったらしい。それぞれ自分の荷物を持ってラーゲルの出口に集まったのであるが、通訳の説明では、今日これから発表される者が今日の帰還船に乗船するのだということである。通訳が時々補足して呼んでくれるが、全く息詰まるような緊張感の連続であった。

いつ呼ばれるかわからない、自分の氏名を今か今かと全神経を集中して待っていないければならないからである。異常なほど緊張した私の耳に「トラノスケ」(寅之助)、「ヒデオ・シバタ」の呼び声が入ってきた。

即座に返事した私は、荷物を持って前に出た。道路に整列し五十名になると、逐次ソ連兵の引率で出発した。

港は二、三十分ばかり歩いた所らしい。間もなく前

方に黒く大きな貨物船らしい姿が見えてきた。「日の丸が見えるぞ」の叫び。マストにはためいている日の丸の国旗と、船腹に「第一大拓丸」と大書した白文字が鮮やかに目に入ってきた。戦いに敗れたとはいえ、祖国健在の感を深くして目頭が熱くなってきた。ラーゲルからの最後の一行が到着すると、急造の粗末なタラップがデッキと岸壁の間にかけてられた。まず、ソ連将校が上がって行ってデッキの日本人に私たちの「リスト」らしい書類を渡して、何やら打合せをして戻ってきた。

いよいよ私たちの乗船である。私もユラユラ揺れるタラップを上りながらも、まだ怖いものに追いかけてられているような気持ちであった。やつとデッキに足を踏み入れて、ようやく助かったという実感と嬉しさが込み上げて、「ごくろうさん」「御苦労さん」と声をかけ笑顔で迎えてくれた船員さんや復員局の職員や看護婦のねぎらいの言葉に、同胞の愛情をしみじみと感じ涙が出てきた。船室に入る前に、皆はこの喜びの感激をもう一度確認するかのようには岸壁を見下ろしていた。

○月○日 数年ぶりに懐かしい畳の上で第一夜

を明かした私は、しばらくそのまま毛布の中で、心から氣を許して熟睡した後の爽快な氣分をゆつくり味わっていた。

体に伝わってくる船の動揺もエンジンの響きも、今朝の私にはリズムカルに感じて、実に心地よいものであった。環境が変わり氣持ちが落ち着いてくると、不思議なことには昨日まで過ごしてきた無我夢中の生活が遠い昔のことのように思えて、ようやく生き延びてきたという自己陶醉のベールに隠れてしまつて、恨み、憎しみの氣持ちが薄らいできたのである。看護婦の朝の巡回が済むと朝食が配給された。ツンと鼻をつく味噌汁と漬物のおい。ひとさわ日本を身近に感じて胸が熱くなつて、それは夢にまで見た日本の懐かしい香りであり、恋しい家族との団欒を思わせるものであった。朝食後、デッキに出てみると、船は日本晴れに輝く大海を南下していて、上氣した頬をなぜる晩秋の微風は氣持ちがよかつた。

○月○日 いよいよ今日、東舞鶴に入港すると

聞いて何となく落ち着かず、ソワソワと船室を出たり入ったりしている者が多かつた。心が高ぶっているせいか、波静かな水平線の彼方に浮かぶ薄雲を日本の島影と見違えることもしばしばあった。「日本が見えたぞ」という知らせにデッキにかけ上がって見ると、左舷前方にそれらしい姿が薄紫にかすんで見えてきた。船が傾くのではないかと思うほど左舷に寄り集まつてきた仲間たちが、感慨深げにジツと目の前に見えてきた母国の姿に涙さえ浮かべて、万感胸に迫るものがあるのは当然である。

日は喜び輝いていた。紺碧の海に浮かぶ島影や深緑の山並みが刻一刻と鮮明になり、岸壁の岩肌がよく見えてきた。昔ながらの緑豊かな日本の海岸美には、もはや凄惨な戦争をしのばせる何ものもなく、平和を表徴する一幅の絵のような美しい静かな眺めであつた。荒涼とした大陸で、ただひたすらに生きることのみに明け暮れた私たちには、目前の平穩な眺めは正に夢の樂園のように見えたのである。汽笛とともに舞鶴湾にさしかかると、緑の山狭の民家や海岸の漁村らしい

集落の家並みがより、はつきりしてきた。私たちの船が進むにつれて視界に入ってくるすべての船から、あたかも私たちを待ち受けていたかのように手を振り、帽子を振って歓迎の挨拶を送ってくれた。予期しなかったこの熱狂的な歓迎に我を忘れて手を振り大声を上げて応えたが、あまりの嬉しさに涙が止まらず、眼前にひらけてきた港の風景も霞んでしまった。やがて船は投錨した。いよいよ日本の土を踏むことができるのだ。

その瞬間がやってきたのである。棧橋には、すでにあふれるばかりの同胞が手に日の丸の旗を千切れるばかりに振って待っていてくれた。陸・海共に港をあげてのこの盛大な歓迎は、私たちへの温かい慰労の心ばかりでなく、力を合わせて祖国の再建に立ち上がるように呼びかけている。日本の力強い息のようであった。

あとがき

これまでに記してきた抑留生活のさまざまな記録は戦後わずか二年間の体験に過ぎないものであるが、私

にとつてそれは果てしなく遠いぬかるみの道を、泥と汗にまみれて重い荷車を引いて歩むに似た長い年月であり、苦しい生活の思い出はぬかるみにクツキリと残る「轍」のように、終生忘れることのできないものである。

いよいよここにペンをおくりに当たり、あらためて戦場の露と消え、あるいは戦後とはいえ、故国を恋い慕いつつ敢えなく異国の土となった同胞の御魂に謹んで哀悼の意を表し、ご遺族の方々に心からご同情申し上げます。次第である。

#### 経歴

生年月日 大正三年十二月十六日生

現住所 和歌山市有本 三七二―二

予備役入隊 昭和十一年三月八日、安東独立守備第

四大隊、東京都小平市、経理学校卒業

終戦時の所属 北支済南、第五九師団経理部

階級 陸軍主計中尉

終戦の場所 北朝鮮 咸興 (八月十五日)

入ソ経路 右 咸興と興南の中程の港、乗船、ポ

セツト經由エラブガへ

入ソ日時 昭和二十年十月一日

復員日時 昭和二十二年十一月二十五日 舞鶴

復員後の職業 紀陽銀行（五十五歳）、和歌山信用金

庫（六十六歳）

現況 退職後、八十歳、現在に至る

### 【執筆者の紹介】

三十年前に柴田氏が復員し、紀陽銀行を定年退職後に出向勤務していた和歌山信用金庫での「庫内報」として記述したものであるということで、それを参考にしていま一度執筆してもらえないかと願ったのであるが、今改めて書くということは、老齢八十歳の彼としては、意を満たすだけの記述は無理であるとして本人からの申し出がありましたので、その実録をお借りできないかとお願ひしたところ、快く拝借することができました。その記録文の部厚い綴りを読みゆくうちに、柴田氏が昭和二十二年末ごろにナホトカにおいて帰還船への乗船ひと時前に、ソ連収容二年間の貴重な記録・

日誌等を廃棄処分しているにもかかわらず、よくもこれほどに正確な記憶と、その時その場所における綿密な観察力にただただ驚かされるばかりである。私自身の三年間の苦悩の体験をそのままに呼び起こされる一ページにつき千五百文字、百七十一ページに及ぶ大作であり、労作であるこの記述をこのままに埋もれさせておくことはできないと私は考えた。

この私たちの尊い昭和時代の歴史の一端を残すための一助とするため、是非とも彼、柴田氏の記録を縮小してでも主要部分を残すことに留意、書写代筆して書き上げることを決意したものである。

（和歌山県 橋本 義治）

### 誰か祖国を思わざる

和歌山県 北村 明

まえがき

ソ連領ナホトカから舞鶴に上陸したのは一九四七年